

昭和60年3月31日、第1回「大堤の笛の音」で始まった胆沢町民劇場。町制30周年を期に「だれもが参加できる文化活動を住民総参加で」と始められました。脚本、スタッフ、キャスト、舞台装置、音楽などすべてが町民の手によるまさに手づくりの舞台を、胆沢の人たちは親しみを込めて「町劇」と呼んでいました。



記念すべき第1回公演「大堤の笛の音」

栄えある岩手日日文化賞を受賞

第1回以後、2〜3月を開催日として毎年続けられてきた胆沢町民劇場。平成18年2月の5市町村合併後も、奥州胆沢劇場に名称を変え活動を継続しています。今では、胆沢に春の訪れを告げる風物詩としてすっかり定着しているこの取り組み。第26回公演を目前に控えたことし2月26日、岩手日日新聞社主催の栄えある第27回岩手日日文化賞を受賞しました。この賞は、県南、宮城県北地域で顕著な功績を残した個人・団体を対象としたもので、ひたむきな情熱と努力で、豊かな郷土づくりの一翼を担っている取り組みをたたえるものです。胆沢劇場は「誰もが参加できる文化活動」をテーマに4半世紀にわたって手作り舞台を公演し、地域住民から高い評価を受けている点が認められました。



26年経っても色あせない、開演を待つ客席の熱気(第26回公演当日)

2日後の2月28日には、第2回市教育委員会表彰で文化功労賞も受賞しています。

たくさんの手と手で支えられる劇場

胆沢劇場は、毎回、伝説や昔からの言い伝えなど、胆沢にまつわる内容を取り上げています。演劇を見たり演じたりすることで自分たちのまちへの理解を深め、ふるさとを思う気持ちを醸成する機会にもなっています。舞台に立つ人、つくる人、そして

応援する人、たくさんの手と手、情熱の集まりからできています。また、直接の参加者以外にも多くのかかわっています。寒い中、地区を一軒一軒歩いて入場券を売る、老人クラブや婦人会の皆さん。ポスターの図案作成では小中学校の児童・生徒や一般の皆さん、特殊効果では建設会社など、多くの皆さんの協力をいただいています。町民劇場は、目に見えないところで、たくさんの手と手によって成り立っているのです。

住民みんなので支える感動の手作り舞台

胆沢劇場は、胆沢町政30周年記念事業の一環として、最初は行政主導ではじまりました。文化活動とは、一般には「見るもの」という意識があるものです。スポーツとは違い、どちらかと言うと、一部の人のものという意識が強くなります。みんなで力を合わせて、1つのものを作り上げようと、「見る文化活動から参加する文化活動へ」を合言葉に船出をしました。

役者ではなくても、大道具や美術など、それぞれの得意分野を生かせる「裏方」にもたくさんの方が集まりました。「町民の人たちはこういうことを待ってたんだな」と、大きな不安がエネルギーに変わっていききました。350人の参加者が結集し、まさに怖いもの知らずで、手づくりの舞台への挑戦が始まりました。

前例のない体育館での公演

しかし、もう一つ大きな問題がありました。それは会場です。当時、県内には先輩格に当たる遠野、花巻、北上という市民劇場がありましたが、それぞれ立派な文化会館がありました。広い胆沢をいくから見渡してみても、

公演ができそうな施設は胆沢総合体育館しかありませんでした。県内どこにも前例のない、体育館での舞台づくり。体育館にはそもそも舞台がないことなど、どれをとっても悪条件です。しかし、やると決まった以上、前に進むしかありません。「体育館でこそできることがある」という逆転の発想を持ち取り組むことにしました。ステージに張り出し舞台を作り、照明はバスケットゴールからつるしました。体育館はホールと違って客席が平面のため、それを生かした、「人柱を担ぐ」などのシーンも実現できました。役者の練習や大道具の作業、美術や衣装作りも、寒い体育館で防寒着を着込みながら行いました。体育館なので、役者も裏

方スタッフも全部のパートが同じフロアでの作業です。逆境が結束を産んだのでしよう。役者が練習の合間に大道具を手伝うなど、まさに参加者が一つになって取り組みが進んでいきました。何から何まで手探りで取り組んだ第1回。なんとか公演にこぎつけた形でしたが、終わってみれば、大成功でその幕を閉じました。当時の参加者は「体育館は手づくり舞台として取り組んだ原点のシンボル」として懐かしそうに当手を振り返ります。体育館時代の手づくり舞台への情熱が、現在の胆沢劇場まで脈々と受け継がれているようです。

第1回に350人の町民が集結

しかし、何もかもが初めての取り組みです。さまざまな不安を抱えながらの船出でした。

第一には人が集まるのかという問題。しかし、必死になって声掛けをした結果、いろいろな人たちが参加してくれました。



【いさわ女性の会・会長】松平 アイ子さん(63)＝胆沢区若柳字大町＝

いさわ女性の会では券売協力員や夜食の差し入れボランティアなどで、胆沢劇場をサポートしています。前身は胆沢連合婦人会。毎年の劇場の準備期間に参加者への夜食の差し入れを無償で行い、公演を側面から応援してきました。初期のころは、婦人会でコーラスを結成して出演したこともあります。

夜食は各地区単位の婦人会交代で準備をしますが、多いときには一晩に200食用意したこともあります。その時は7升のご飯を炊きました。

胆沢劇場は胆沢の伝説・昔からの言い伝えを題材に取り組んでいて、心が通うような劇ですね。「みんなで一つのことをやるんだ」という取り組みで、できるだけお金を掛けずに行ってきましたので、応援したくなります。良い「人づくりの場」で、社会教育のお手本ですね。みんなが協力しないとできないことです。劇場に参加しない人でも、家にあった昔の衣装や火鉢を提供するなど、区民みんなが、何かの役に立てればと思っています。

the History



- 【奥州胆沢劇場全26公演】
- 第1回 「大堤の笛の音」(昭和60年3月31日)
- 第2回 「水ぬるむ里」(昭和61年3月22〜23日)
- 第3回 「白い花のふるさと」(昭和62年3月21〜22日)
- 第4回 「小夜姫物語」(昭和63年3月19〜20日)
- 第5回 「柘一寛政の百姓一揆より」(平成元年3月11〜12日)
- 第6回 「暮六つの鐘」(平成2年3月10〜11日)
- 第7回 「雪に抱かれて」(3年3月23〜24日)
- 第8回 「山脈を越えて」(4年2月29日〜3月1日)
- 第9回 「湖(ダム)―石淵の春―」(平成5年3月6〜7日)
- 第10回 「二枚の立て札」(6年2月26〜27日)
- 第11回 「れんげ草の詩」(7年2月25〜26日)
- 第12回 「春のゆくえ」(8年2月24〜25日)
- 第13回 「土」(9年2月22〜23日)
- 第14回 「ありがと〜青空からの贈り物〜」(10年2月28日〜3月1日)
- 第15回 「火種〜未来への継承〜」(11年2月20〜21日)
- 第16回 「お米はタイムマシーン」(12年2月19〜20日)
- 第17回 「うるおう大地〜寿庵壇物語〜」(13年2月17〜18日)
- 第18回 「幸の松騒動記」(14年2月16〜17日)
- 第19回 「愛の山河」(15年3月1〜2日)
- 第20回 「小夜姫伝説」(16年2月28〜29日)
- 第21回 「小夜姫伝説(大東町公演)」(16年3月20日)
- 第21回 「乱世の姉妹」(17年2月19〜20日)
- 第22回 「つぶっこ太郎」(18年2月18〜19日)
- 第23回 「てぬくい地蔵」(19年2月24〜25日)
- 第24回 「阿伝」(20年2月23〜24日)
- 第25回 「きつね火」(21年2月22日)
- 第26回 「十五の春〜幻の小山飛行場〜」(22年2月28日)